様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２００９０

研究課題名（和文）戦後日本ナショナリズム論－戦争の集合的記憶に関する日中比較思想史研究

研究課題名（英文）Postwar Japanese nationalizm theory

研究代表者
樋口　浩造（HIGUCHI, Kozo）

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：３０２４３１４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：４年間、着実に、地域及び中国での戦争の記憶に関する、現地調査を行ってきた。南京・上海に残る慰安所、ハルピン・瀋陽・天津・北京・台湾など各地の戦争記念館を訪問調査し、南京の慰安所での聞き取り調査については成果として残すことができた。また、南京師範大学の虐殺研究センターで講演するなど、現地との交流も進めた。中国人強制連行の被害者、二名への聞き取りについても、現在成果をまとめているところである。また、地域に根ざして「愛知に眠る英霊たち」といった文章を残すことができたし、愛知県の大府市の中国人強制連行問題に関して、史料紹介を残すこともできた。現在、大府の飛行場の、位置等についての論考を準備中である。

研究成果の概要（英文）：I visited many of the War Memorial and comfort staition in China and Aichi Prefecture.I wrote some papers about the results of interviews and the investigation.

研究分野：日本思想史

キーワード：戦争記念館　慰安所　中国人強制連行　ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

本研究は、江戸の自国意識の研究からスタートし、すでに**１０年以上に及ぶナショナリズム研究の一環**であり、直近では基盤研究Ｃ「日本ナショナリズムと戦後思想－戦争の記憶・表象に関する比較思想史的研究」の発展的継続でもある。また、記憶や表象に関する研究あるいは戦争記念館への着目は、日本史をはじめ多くの学問領域で行われているが、その**思想史的研究はほとんど行われておらず、先駆的な研究となる**ものである。

２．研究の目的

本研究は、戦後日本の思想史上の問題を日本ナショナリズム論として考察する。戦後民主主義を問うために三つの柱で本研究を構成する。①戦後思想の中心的役割を果たしてきた丸山真男等知識人の**思想的テクストを、平和思想とナショナリズムとの相関関係から分析**する。②全国各地の戦争記念碑や記念館等を調査し、草の根で受容される戦争の記憶を検討する。**頂点思想家のテクスト分析と、フィールドワークによる草の根の思想分析との交差点を探る**、新しい思想史研究の試みである。③同時に、**日中の戦争記念館を比較思想史的に分析**する。日本における特殊「靖国」問題を、東アジアに共通する戦没者と国民との関係の問題として、開かれた議論としていく。

本研究の目的の第一は、ナショナリズムの中でも、いわゆる「健全」と称されるナショナリズムについて考察を加えようとする点にある。幕末以来の中央集権国家を建設しようとするナショナリズムは、従来「健全」なるものとして議論され、それが「排外的」で「超国家主義的」なものに変質したとする通説的理解があるように思われる。しかし本研究は、こうした立場をとらない。「健全な」ナショナリズムの我々意識のうちにこそ、現在を含む戦後社会の問題が胚胎していると考えるからである。戦後の社会の在り方を根底から問い直すような視線を獲得するためには、**戦後民主主義を支えてきた「健全な」ナショナリズムへの問いが不可欠**であるとする認識に本研究は支えられているし、それがこの研究の目的でもある。手放しで迎えられた戦後民主主義自体の功罪を冷静に分析すべき時期に来ているのではないだろうか。こうした立場にたって、戦後知識人の発言をあらためて分析していく。また、こうした立場に立つことを通じて、歴史修正主義との真の対決も可能になるものと考えている。

また本研究は、ナショナリズムを戦没者祭祀や戦争の記憶の問題として考察することをもう一つの目的としている。**中国の戦争記念館、博物館の歴史表象と国内の遊就館をはじめとする諸施設の展示表象とを比較検討する**ことを合わせて行いながら、それぞれの国家・地域が戦争の記憶・表象を通じてどのように国民形成を行っているのかを検証し、東アジアで唯一戦後民主主義体制下にあった日本ナショナリズムの特色を浮かび上がらせたい。それは同時に、東アジアにおける日本の国民形成の特徴を考察することでもある。こうした研究を通じて、日本の戦後民主主義の質を問い直すことが、本研究の目的である。

また方法的な取り組みとして、**頂点思想家のテクスト分析と、社会的に流布する戦争の記憶との交差点あるいは落差を探る**ことも本研究の目的のひとつである。アカデミズムの生み出す平和思想やナショナリズムの主張の検討はもちろん重要であるが、人々のあいだに流布されていく戦争記念館や記念碑の思想が置き去りにされてはならないと考える。この両者を同時並行的に分析していくことで、時代思潮をより広い視野から捉える方法的な模索を行うこともまた本研究の目的である。平和国家日本をめぐる知識人の発言と、おそらくそれらとは大きな落差をともないながら作られていく戦争記念館の思想を、そのどちらもが戦後日本のナショナリズムの形成に参与してきたとする見通しのもと考察を加えていく。そうした新しい取り組みを通じて、**ナショナリズムをある一面からでなく、集合的記憶として捉えていける研究**を試みたい。

以上、頂点思想家の作り出す健全なナショナリズムと戦争の記憶装置としての博物館等の展示表象の両面から、戦後日本のナショナリズムと民主主義との相関性を反省的に問い直して行く。

３．研究の方法

本研究は、前回科研において行ってきたナショナリズムの理論的考察や丸山真男をはじめとする知識人の思想についての考察を踏まえながら研究課題に取り組む。２４年度は資料収集とその読解につとめながらも、国内外の調査に力点を置いて調査を行う。日中両国の戦争記念館の基礎的な調査はすでに進めてきたが、それら記念館の中での**展示内容の歴史的変遷を問題に**せねばならず、その変化を読み取れる資料を現地の協力を得ながら収集していきたい。２５年度以降は、調査と資料収集を継続しながらも、徐々に思想家のテクスト分析に力点を置いて研究を行う。戦後早い時期の混乱も含めて、**講座派と目される思想家の発言を、国民形成のためのナショナリズムの主張として、丸山や竹内好と読み比べていく**。最終的には**比較思想史の観点を保持しながら、草の根のナショナリズムとアカデミズムの主張との交点としての集合的記憶を明らかに**する。

テクスト論のための資料収集と、戦争博物館等での集中的な調査・資料収集を並行して行う。テクストの収集では、講座派関係の資料だけでも多岐・多数に上るため、それらをで

きるかぎり網羅的に収集すると同時に、一方では戦没者関係の一般市場では入手困難な、たとえば靖国神社が発行している内部資料（一次資料）などの収集にも努めていく。また、戦後の集合的記憶を考えることは、天皇制を考察することを抜きにしてはできない。特に戦後天皇制を成立させた日本国憲法成立に焦点を当てる研究文献の収集と整理にも力を注ぎたい。そうした資料と研究文献から、**憲法一条のもとでスタートした戦後の象徴天皇制下での靖国をはじめとする戦没者のための慰霊や記念の施設について考察**を加えていく。それは、靖国神社と天皇制を通してみる、戦後日本の合意形成の問題であり、日本ナショナリズムのひとつの在り方を抽出する作業である。その前提となる問題意識として、戦後憲法は平和憲法といつ呼ばれるようになり定着したのかということに関する批判的な見通しがある。天皇の戦争責任を問う一条への批判的な言及が当時あり得たのだろうか。つまり憲法の問題は九条ではなく一条にあったのではという仮説のもと本研究を行っていきたい。

もう一方で、**日本の主要な戦争記念館の主張を見ていく**ことを並行して行う。靖国の遊就館の展示はその典型例であるが、例えば鹿児島知覧の特攻平和会館や沖縄の平和祈念資料館、広島・長崎の原爆資料館など調査すべき対象は数多くつくられてきている。また、こうした知名度の高い資料館等とは別に、逆に政府からは取り残されてきた、空襲の被害者のための資料館や記念碑が全国の都市に散在していることにも注目したい。こうした、**ナショナルな政策からは漏れ落ちた死没者に焦点を当てることで、国家的な観点からは切り捨てられた民間人死没者の問題や、軍人軍属だけが優遇されている現状が浮きぼりに**なるはずである。また全国に、例えば花岡をはじめ中国人強制連行を記憶に残そうとする地域や、朝鮮人が強制をともないながら徴用された、鉱山をはじめとする現場が保存されている地域が多数ある。初年度は、主な記念館でいまだ調査できていないものを調査すると同時に、ナショナルな視点からは忘れ去られようとしている侵略戦争や植民地支配の記憶をとどめる場を、まずは愛知県立大学の地元である東海地域での掘り起こしから行っていきたい。地元の戦争遺跡の掘り起こしは、愛知県内では、知多半島の上海事変時の軍人人形、三ヶ根山のＡ級戦犯を祀る殉国七士の墓、あるいは大府市の飛行場建設のために行われた中国人強制連行など、地域を少し広げると、岐阜県及び静岡県に残された日露戦争時の精巧な「英霊人形」の調査も文書資料が残されており、その収集・検討を行いたい。また中国各地の戦争記念館の調査は、初年度だけではとても無理だが、各年度に分散しながら調査に訪れたい。主なものを挙げると、北京抗日戦争記念館と瀋陽９・１８事変博物館、南京侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館と南京福安里に遺る慰安所の建物、台湾の台北二二八紀念館、国軍歴史文物館、香港の歴史博物館などが必見であると考えている。

４．研究成果

アジア各地の戦争記念館を数多く訪ねることができた。

2012 年には、南京民間抗日戦争博物館、ハルピンの７３１部隊の記念館では館長と直接面談することができた。長春では、偽満皇宮博物院、偽満州国務院、偽満州国軍事部旧祉、張氏帥府博物館等を調査・見学。瀋陽では、９１８記念館、撫順の戦犯管理所、平頂山惨案遺祉及び慰霊塔等を調査・見学。大連では、旅順博物館や白玉山塔を始め日露戦争の関連の遺跡を調査した。また、南京師範大学では、虐殺研究センターの主任張先生と歴史を学ぶ大学院生３０名との、小さなシンポジウムの形で交流し、「靖国神社問題と日中関係」と題して報告した。さらにアジア最大の慰安所、「利済巷」を見学し、福安理の今も残る旧慰安所で、聞き取り調査を行った。また、上海の旧租界が、日本の侵略のみに歴史を単純化し、例えば旧フランス租界の新天地が、最先端の街として整備されていることも確認できた。

2013 年にはシンガポールでは、イメージオブシンガポール、シロソ砦、血債の塔、日本人墓地などを訪問した。移民国家であるシンガポールで、それぞれの民族が同じシンガポール人（ナショナルズ）であるとの認識を常に喚起させ国家を維持していることを知ることができた。ナショナリズムが意図的に維持されるものであること、また、その形成に日本の占領が強く関与していることを知ることができたのは、収穫であった。

台湾では、台北の中正記念堂、国軍歴史文物館、二二八国家記念館、二二八市記念館、国家人権博物館、原住民博物館、総統府を訪れた。日中戦争の評価をめぐって二つの歴史観が拮抗する台湾の現状を知ることができた。また、新しくできた人権博物館では、白色テロルで２２年の獄中生活を送った人の話を聞くことができた。

2014 年には、上海師範大学に慰安婦歴史館があることを知り、また、旧日本軍が最初に作ったと言われる慰安所：大一サロンが残存していることを情報として入手することができそれを訪問した。大一サロンについては、地元の慰安所に詳しい方の案内で、現存する建物を外側から確認できた。旧日本人街に接する場所で、「横浜橋」を越した辺りは、慰安所が立ち並んでいたことが分かった。大同では、著名な 6 万人が亡くなったとされる万人坑、大同炭鉱の煤峪口を訪ねた。ミイラ化した捨てられた遺体を見ることができた。

2015 年には初めて中国の現地（保定市）で、家を訪ねての中国人強制連行についての聞き取り調査を行った。二名の幸存者の聞き

取りができた。また、保定市からの日帰りで定州市の三光作戦が行われた村の、幸存者に会い、聞き取りを行うこともできた。また、唐山市の日本軍による虐殺が行われた惨殺記念館を訪ねることができた。大変な道で貧しい田舎だったが、村全体が保存された状態で貴重な調査ができた。

北京抗日記念館・天津の強制連行記念館あるいは、上海の抗日記念館や南京の大屠殺記念館などには複数回訪れ、展示の変化についても確認してきた。

全体として、フィールドワーク、さらには聞き取りへと、研究は進んできているが、これを頂点思想史と交差させる方法的な枠組みに関しては、現在も思考中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 樋口浩造「権力の誘惑―靖国を考える視点設定をめぐって」単著　査読無し　『日本思想史学』2015 年 9 月

② 樋口浩造・西井麻里奈史料紹介：「証言：日中戦争下の南京―松下富貴楼をめぐって」解説、及び注記　共著　査読無し　『愛知県立大学日本文化学部論集歴史文化学科編 5 号』2014 年 3 月　p7～p49

③ 樋口浩造・杉浦茜史料紹介：中国人強制連行・地崎組『華人労務者就労顛末報告書』について　共著　査読無し　『愛知県立大学日本文化学部論集歴史文化学科編 4 号』2013 年 3 月　p48～p99

〔学会発表〕（計１件）

① 樋口浩造「靖国神社問題と日中関係」2012 年 12 月（於：中国　南京師範大学南京大虐殺研究センター）

〔図書〕（計２件）

① 樋口浩造『大学的愛知ガイド』共著　担当「愛知に眠る「英霊」たち」　昭和堂　2014 年 3 月 p97～p110

② 樋口浩造他「『国境の歴史文化』共著　担当：ナショナリズムと「日本文化」論―「文化」の境界を越えるために」清文堂　2012　3月　P69～p92

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

樋口　浩造（HIGUCHI,Kozo）
愛知県立大学・日本文化学部・教授
研究者番号：30243140

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：